

パルテノン多摩 文化講演

「日本人はいま何を考えればよいのか」

講師：橋爪 大三郎

1997年12月6日(土) 午後2時開演

パルテノン多摩小ホール

【司会】 本日は、パルテノン多摩文化講演にご来場いただきまして、まことにありがとうございます。この文化講演では、社会学者で東京工業大学教授の橋爪大三郎先生をお招きし、「日本人はいま何を考えればよいのか」をテーマに講演していただきます。

21世紀を目前に控え、日本社会はさまざまな問題を抱えていますが、日本人として、今、何を考え、どのように行動すればよいのか、橋爪先生に今後の指針と展望を語っていただきたいと思います。

それでは、橋爪先生、お願いいたします。皆様、大きな拍手をもってお迎えください。

〔拍手〕

【橋爪】 こんにちは。今ご紹介いただきました橋爪です。きょうは土曜日の午後なのに、大勢お集まりくださって本当にありがとうございます。

いただきました題は、「日本人はいま何を考えればよいのか」という題です。お節いな題だなと。一々人に言われなくても、いろいろ日ごろ考えているよと、こういうことかもしれませんけれども、もう少し大きく広く物を考えるということを理解いたしますと、今非常に混迷の時代になって、景気も悪くなって、いろいろ思っていたのと違った展開になっておりますね。特にバブルのころにローンを組んで家を買ったりされたような方は大変困っておられるのではないかと思います。そういうことを含めて、いろいろ今後の先行きを考えなければならないということも多いかと思います。きょうは、そういうことを含めまして、日本の現在についていろいろ考えてまいりたいというふうに思います。いただいた時間が2時間ぐらいですけれど、1時間半ぐらいでお話を締めくくって、その後30分ほど質疑討論の時間をちょうだいしたいと思います。私、いつも皆さんのお前でお話するときには質疑討論というのをとても大事にしております。私にとっても思いがけない勉強になることが多いので、どんなことでも結構ですから、質問を提起していただければ、お答えしたいと思います。

お手元に、細かい字でごちゃごちゃ打ったレジュメがあります。私はいつも、おしゃべりなものですから、何もないとつい時間が延びてしまうので、きちんきちんと時間どおりに終わるために用意するもので、私のためのメモです。これに沿ってお話ししていくのですが、このレジュメの細かい字を見ておきますと、何の話だったかわからなくなってしまいますので、これはお土産ということで、おひざの上に置いてくださって、とりあえず私のお話の方に集中していただければ、わかるようにお話しするつもりであります。

全体は4つのブロックに分かれておりますが、最初に、物を考えるとは何かというふう

なことを簡単にお話しします。

結論として言いたいことは、まず、物を考える場合、現状認識ですね、今どうなっているかということをよく理解する。それから、自分の希望ですね、こういうふうにしたんだということをはっきりさせる。ここで初めて物が始まるわけなんですけれども、ですから、今、日本はどうなっているのかという現状認識。それから、これからどういうふうにしたんだという、はっきりした希望ですね。これを皆様お一人一人がしっかりつかまれたならば、日本のあしたはきょうから始まるわけですね。

ということで、そのお手伝いをするために、私が、世界、そして日本をどう考えているか、これが2番目のブロックと3番目のブロックです。

それから、最後に、日本をどうすればいいのか。これは皆さんお一人一人がお考えになることでしょうけれど、私にも考えがございますので、それを紹介しました。それが第4番目のブロックというわけです。こういうふうに進んでまいります。

それでは、最初の「人間は、なにを考えてきたのか」。つまり、物を考えるということなのかなという、そういうことをちょっと考えてみたいと思うんですね。

人間は考える葦だとか、何だと言われておまして、物を考える動物です。考えなくてもいいことまでいろいろ考えてしまって、そういう動物なんですけれども、いろいろなことを考えるわけですが、一体どういうことを人間は考えているのだろうかなど。私、社会学者という立場上、そういうことを整理してみました。

いろいろなことを人間は考えていると思うんですが、概括的に言いますと、まず、だれでも必ず考えることは、自分の身の回りのことではないでしょうか。おぎゃあと産まれた瞬間から、いろいろ不思議なことが周りにありますので、「一体何だろう？」という疑問の連続で物を考えて、あ、これは食べ物か、これは着物だから、こうやって着なくちゃいけないとか、あれはお日様で、これは星で、そして、これは動物で、これは人間で、お父さんと、友達で、世の中はこうなっていると、そういうふうな身の回りのことを一つ一つ理解して考えていく。これはどんな人間でも必ずやることだと思うんですね。これは、考えればいいのか悪いとかということではなくて、だれでも必ずしていることであります。

そして、いろいろなことを日々考えていくわけでしょうが、それを非常に簡単にしてみますと、二つぐらいあるかなと思います。私は、ごちゃごちゃしていることを簡単にするというのが性分でござしまして、何でもすぐ簡単にしてしまうんですが、そうしますと、人間が物を考えているときには二つの考え方があって、一つは予測、事実認識ということ

だと思います。こうなっている、こうなるはずだということですね。自分の身の回りの世界は、そして、ほかの人たちは、こういうふうになるんじゃないかなと。例えば、今晚のおかずはコロケなんじゃないかな、こんなふうなことをすぐ考えてしまうわけですね。もう一つは、自分の願望です。希望です。こうなるといいなということですね。こういうことも考えるでしょう。コロケはもう飽きたから、トンカツだったらいいのになと、こういうふうなこともつい考えてしまうわけですね。事実はこちらである、しかし自分の希望はこちらである、こういうことをいつも考えているというのが人間のさがであります。

その事実認識や予測の方は、突き詰めていきますと、これはサイエンス、科学ということになりますね。世の中はこうなっている、こういう理屈で動いている。来年はこうなるだろう。実験の結果はこうなるだろう。そういう予測ですね。これはだれがやっても同じ結論になるはずですよ。

もう一つの希望の方は、これは一人一人、心のあり方や思いが違いますから、みんなで相談しても別に同じ結論にはならないですね。Aさんはこれがいいと思う、Bさんはこれがいいと思う。世の中はそうしたものです。ですから、これは突き詰めれば、文学とか芸術とか哲学とかというものになっていくんじゃないかと思います。

こうやって、私たちは日常を送っているわけなんですけれども、物を考えると、すべて物事を認識できて、そしてすべて希望のとおりに行くかなんていうと、全然そんなことはないんですね。

一つ例を挙げれば、例えば、人間の生き死にの問題があります。死なないように皆さん注意されていると思うんですけども、それでもいつかは死んでしまう。一体いつ死んでしまうのだろうか。これは、自分の死ぬ時期ですから、自分にとっては一番根本的なことのはずですけど、ここでそれをご存じの方は多分いらっしやらないはずですよ。私も自分がいつ死ぬかわかりません。そしてまた、どういうふう死ぬかもわかりません。交通事故で死ぬか、どういう病気で死ぬか、何歳ぐらいか、そんな一番大事なことをがわからないんですね。ですから、世の中で起こることの——自分の生き死にがわからないぐらいですから、ほかのことが、幾ら考えてもわかるわけは実はありませんね。というわけです。

では、次に自分の希望ですね。自分は一体何をやりたいんだらう。どういうことが起これば、自分は一番幸せになるんだらう。これは自分が一番よく知っているような気がいたしますが、よく考えてみるとわからない。いつもそういうことで、「あれ？ こんなはずじゃなかった」とか思いながら、人間は悩んで生きておりますね。

こういうふうには、日常の細々したことも考えれば考えるほどが切りがないということにして、そういうふうになると、幾ら物を考えても全くむだだと、行き当たりばったり生きていっても同じじゃないかと、こんなふうな結論になってしまいそうですけど、私はそうは思いません。確かに物を考えてわかることには限度がありますが、しかし、物を考えていけばいっただけ自分にプラスになる、世の中にプラスになる、こういうことがあると思います。

それで、2) のところなんですけれど、人間は、身の回りのこと、家族のことのほかに、もうちょっと広い範囲のことを同時に考えていくような生き物なんじゃないかなというふうに思います。

例えば、社会というのが今あります。日本というのも社会ですし、地域社会であるとか、いろいろな社会があると思います。自分が余りよく知らない人や、余り大事だと思っていない人たちとも、実は太いきずなでつながっていて、お互いに生きているという、そういう実際がありますので、社会のことも考えていくということなんですけれど、ここでの特徴は、社会というのはどういうことかということ、非常に簡単に言うと、みんなが何を考えているかということを考える必要がある場所なんです。

卑近な例を挙げます。例えば、競馬に行きます。競馬の馬券というのを買う場合、まずオッズというのを見ます。これは、本命を買うと何倍で、穴馬を買うと何倍でと書いてあります。あれは何かというと、みんなが何を考えているかということなんです。みんなが、1着になるだろうと思っている馬は本命ですね。そういうことがわかった場合、みんながそう考えているんだから、この本命が1着になるはずだと考えて、自分も同じように考える。こういうこともできます。それから、みんながそう考えているなら、実は裏を読んで、穴馬を買って大もうけをしてやろう、こういうことも考えられます。

これは、つまり社会的な現象であります。馬は社会のメンバーじゃありませんので、別に自分が本命だということで、頑張って走って、ほかの馬が遠慮する、1着になってしまう、こういうことはないんですが、世の中で動いている出来事というのは、人間に関する予測です。例えば、あの人は政治家として立派だとみんなが期待すると、期待された本人は、立派な政治家として行動し始めたりなんかするわけですし、こういうふうにはみんなが考えるということを考えるというふうになりますと、だんだん、みんなの考えることが同じ内容になってきて、それが煮詰まって社会の枠組みになっていきます。

道徳なんていうものはそうであります。人間はこういうふうにはなくちゃいけないと、

みんなが思っています。例えば、物を盗んじゃいけないとかということの子供は学習してきますと、物を盗んではいけないということが、いつの間にか自分の考えの中にしみついてまいります。これが道徳です。法律もそうです。みんながいけないと思っていることはいけない。それをはっきり書いてしまうわけですね。

こうやって、社会というのは、みんなが何を考えているかということをもぐってでき上がっている制度という面があるわけですから、世の中を生きていこうと思えば、みんなが何を考えているか、そういうことをよく理解する必要があります。

例えば、大昔だったら、おまじないとか、そういうことを理解しないとだめでしょう。中世だったら、どこの家がこういう家柄で、名誉があるとか、そういうことを理解しないとだめでしょう。近代、今の時代だったら、学校教育で教えるようなこと、みんなが知っていることを自分も知っていると、だめでしょう。世の中の仕組みもわかっていないと生きていけないでしょう。そういう意味です。こういう社会のことを考えるというのは、日常のことではないですけど、現代人として生きていくためには必要なことです。

もう一つは、宇宙というふうにはここで書いておきましたが、我々は一体どこから来たのだろうかとか、太陽は何で燃えているのだろうかとか、宇宙はいつになったら終わってしまうのだろうかとか、こういう考えても考えてもどうしようもないような問題というのがあって、こういう問題も、人間はつつい考えてしまうわけですね。考えてはみるものの、大抵結論は出ません。結論は出ないんですが、普通どうなるかといいますと、そういうことを一生かけて考えて抜いたプロというのがいます。これは偉大な宗教家であったり、哲学者であったり、科学者であったりなんかするわけですけども、自分が考えて、考えて、考え抜いた結論がこうだったみたいなことが、岩波文庫か何かに書いてあるわけですね。そこで、そういうものを買って来まして、あ、そうだったのかというふうには納得する。これが、その時代の知識をつくります。宗教とか哲学とか。そして、こういうものに支えられて、一人一人の人間は、余り不安にならないで生きていくことができるというわけで、こういう知識の領域でも広がっていかないといけないと思います。これは人文科学と社会科学ということかもしれません。

ということで、人間は全く自由ですから、何を考えてもいいんですけど、私の整理によりますと、まず、人間は自分の身の回りのことを考えていくと同時に、自分の身の回りより広い範囲のことを考えていくはずだと。そして、そうやってみんな生きていくんだという実態があると思います。

そこで、私はすばらしいと思うのは、自分に直接関係のないこと、身の回りの範囲でないことも、人間は真剣に考えることができるということです。そして、その結果、見たこともない人、外国の人、地球全体が今協力して一つの国際社会をつくる、そういう段階にまで来たということです。これは、人間がどれだけ物を考える力があるかということだと思っんですね。もちろん、それにはいろいろな問題もあるんですけれど、このこと自体は、私はすばらしいことだと思います。

物を考えるということは、自分の小さな存在を抜け出ていくことです。自分が男性であったら、女性というのはどういうふうにして生きているんだろうというふうを考える。自分は選んで男性になったわけじゃないんですけれども、私の場合。でも、そういうふうを考えることによって、自分の人生が倍になったような気がします。

大昔の人間はどういうふう生きていたんだろう。外国では一体どういふふうな人々がどういふふう生きていたんだろう。そういうふうなことを考えていくことによって、たった一回きりの自分の限られた人生を、さらに大きく膨らませて10倍にも100倍にも生きていく、こういうことが物を考えることによって開かれてくるんじゃないかというふうに思います。

ですから、物を考えることは、人間の尊厳、厳粛な行いであって、そして人生をより豊かに味わい深く生きていくために必要なことであって、また、こういう国際的な大勢の人間が一つの社会をつくっている場合には、責任といいますか、教養といいますか、義務といいますか、常識といいますか、そういう部分でもあると、こういうふうなことではないかと思っんですね。

今のは前置きでございまして、この後、では、現在、世界は一体どんなふうな時代に差しかかっているのか。それから、日本はどんな国になってしまっているのか。こういうふうなことを、2と3というところで考えてみたいと思います。

ことは1997年で、もう12月になってしまいました。21世紀まで、あと3年ちょっとですね。21世紀は、何でも2001年から始まるらしくて、2000年ではないそうであります。諸説あるんですが、2001年といたしますと、あと3年ですね。ということで、大きな節目がやってまいります。別に100で割り切れたから何か新しいことが始まるとは思えないわけです。しかし、人間が、21世紀になると何か新しいことがあるかもしれない、こういうふうみんなが思っているときには、本当に新しいことが起こるかもしれないので、一応そういうことで考えてみましょう。21世紀がどんな時代にな

るのか。19世紀から20世紀になるときも、いろいろな人がいろいろなことを言ったんだそうです。でも、残念ながら大抵外れてしまいました。

ということで、今いろいろなことを考えても、余り当たるとも思えないんですけど、しかし私はいろいろな人がいろいろなことを言っている中で、割合確からしそうなことを幾つか見つけてまいりましたので、ここでご紹介したいと思います。

1番目にご紹介したいのは、マイクロソフトという会社の社長さん、ビル・ゲイツという人が言っていることです。ビル・ゲイツというのはアメリカの億万長者で、皆さんご存じだと思いますが、ウィンドウズというのをつくった人ですけど、彼は、情報スーパーハイウェイというものをアメリカじゅうに、いや、世界じゅうに引くんだと、こういうふうに言いました。これは何かというと、私は余りよくわかりませんが、これぐらいの太い光ファイバーケーブルというのを各家庭全部、国じゅうに張りめぐらせてしまうんですね。そうすると、どうなるかということ、テレビのような画像が瞬時にリアルタイムに刻々と送られてくる、こういう状態になります。世界じゅうが画像で結ばれるということですね。

インターネットとどう違うんだということになりますけれど、インターネットをおやりになっている方がいらっやと思うんですけども、インターネットは線が細いんですね。ですから、ちょっと大きな絵を送ってこようと思うと、私のぼろいインターネットですと、何か2時間ぐらいかかたりします。今読み込み中とかといって、絵が上の方からテッと出てくるんですけど、途中でとまったり何かいろいろしながら、2時間ぐらいたってもまだ終わらない。絵を一枚送るのにそんなにかかるんですから、テレビ電話なんてとんでもないですね。ということで、これは線が細いのが問題なんですけれど、それを光ファイバーで太くしてしまえば、普通のテレビみたいに絵がどんどん入ってくる。こういうふうになりますと世の中は変わるんじゃないかと、こういうふうなことをビル・ゲイツは言っているわけですね。

技術的なことはさておいて、私が思いますのは、情報化、コンピューター化というのは今後ますます進むだろうと。そして、送られる情報の量はますます多くなる。情報の値段はますます安くなって、だんだんただみたいになる。こういう方向に世の中が進んでいくに違いないと思われます。これが1番目です。情報の値段が安くなります。

さて、2番目は、レスター・ブラウンという人がおります。この人は、ワールドウォッチ研究所という研究所を主宰しているリーダーでありますけれども、地球環境がどれぐら

い汚染されているかみたいなことをいつも調べておりまして、政府などに警告をしているという、緑の番人みたいな人ですね。このレスター・ブラウンさんはいろいろなことを言っていますけれど、21世紀になると地球環境の破壊がどんどん進んで、ますますひどいことになっていこう、こういうふうな予測を述べています。これはほかの人の予測とみんな一致しています。

今、ちょうど京都で国際環境会議みたいのが開かれていて、地球温暖化の問題を協議しています。地球が温まっているんだそうですね。産業社会が発展し過ぎです。このままほうっておくと、氷が解けて海の水が上がったり、気候変動が起こって大変なことになるから、早くしようと、こういうふうなことも相談しなければならない時代になっているわけですね。

その問題には深入りしませんが、結論として言いますと、20世紀みたいに資源をじゃんじゃん使ったりするというのは、もう21世紀になると無理になるということですね。無理になるから制限しなきゃいけない。制限しなきゃいけないとなると、どうなるかという、値段が上がるわけです。今、アメリカでは石油が安いですが、でも、本当はもっと高くして、節約しなくちゃいけないですね。石油を節約するには、値段を上げなきゃなりません。石炭はたくさんあるんですけど、硫黄とか炭酸ガスとかがじゃんじゃん出てくるんですね。というわけで余り使えない。余り使えないのなら、やはり値段を上げなくてはならない。

というわけで、エネルギーの値段はどんどん上がりますので、工業製品の値段はだんだん安くなってきたんですけども、これからはそうとも限らなくて、だんだん値段が上がっていかなくちゃならないんじゃないか。環境に優しくするために、環境を破壊する傾向のある商品の値段をどんどん高くしていく、こういう時代になると思われまます。つまり、エネルギー価格やエネルギーを使ったものの価格が上がる。

3番目は、これは19世紀、大昔のマルサスという人が言い始めて、それから、1970年ごろにローマ・クラブという団体がもう1回言ったことなんですけれど、21世紀は人口が増え過ぎて食糧が足りなくなる、こういう予測です。食糧は今のところ余り足りなくなっていないんですけども、間もなく足りなくなるということなんです。人口の方は、これは予測が出たのが1970年ですけども、その後、それを上回るスピードでどんどん増え続けております。今60億ぐらいですけども、いろいろな予測がありますが、2050年ぐらいには100億を突破。その後、最も人数が多くなるケースでは、21世

紀の終わりに200億ぐらいまでいってしまうんですね。途中で頭打ちがかかったといたしましても、150億ぐらいで大体推移することになるだろうと。

そうすると、どうなるかということ、現在の倍以上の人間が地球に住んでしまうことになります。もし、今の農業の生産性がそのままだといたしますと、今の倍の耕地が要りますが、平らなところは大体もう農地になってしまっているわけですから、新しく農地にするところなんかは余りありません。それで森林を伐採したり何かいろいろやっていると、環境の破壊がひどくなって、もう大変なことになります。食糧の増産は限度がある。人口は増えてしまう。どうなるかということ、貧困の問題が起こります。こういうふうなことがかなり確実に予測される。これが3番目ですね。人口が増えて、食糧の値段が上がります。

さて、以上をまとめるとどうなるかということ、わかりやすく言うと、こういうことですね。第三世界であろうと、何であろうと、すべての人が、だれがどこで何をやっているかという情報を安く手に入れることができるようになります。第三世界の小学校なんかでも、スイッチを入れると、先進国ではこんな大きな家に住んで、こんなに教育が行き届いて、こんなに豊かな生活をしているということが手にとるようにわかります。しかし、実際には、食糧が高く買えない。石油は高く買えない。貧困はそのまま。資源の配分は非常に不平等で、極端に豊かな一部の国と貧しい大多数の人々がいる。この現状は21世紀を通じて変わらないでしょう。しかし、今、先進国の状態というのは余りよく発展途上国に伝わっていないんですけど、しかし情報だけであれば、世界じゅうの人が共有できる。隣に大金持ちが引っ越してきて、のぞけなければ別にうらやましくもないんですけども、毎日ビフテキを食べたりなんか、おいしいブドウ酒を飲んだりしているらしいなんていうと、よそにいればいいんですけども、隣に引っ越してくると、結構何かひがんだりしませんか。そういうふうな感じのことが地球規模で起こりまして、フラストレーションがどんどんたまっていく。こういうのが21世紀なんじゃないかと。余りバラ色の予測でなくて申しわけないんですけども、こういうふうなことが言えると思います。

そうすると、どういうふうなことをみんなで考えるかということ、では資源を節約しましょうと。今までエネルギーを使い過ぎていたけど、同じ冷蔵庫でも電気代を半分にしようとか、こういう節約型の技術開発というのがとても大事になってくると思います。そういうのを先端科学技術ですね。地球環境に優しい科学技術というのに、みんな血眼になって研究するに違いない。

それから、これも余りありがたくない予測ですが、私の予測によりますと、オウム真理

教と北朝鮮とリビアのカダフィ大佐をみんな足して合わせたような、そういう新宗教というのができて、悪いのはアメリカ、ヨーロッパだ、日本だと。そして、私たちは、この地球を平和な星につくりかえる義務があるとか、緑の救世軍とか、そういうふうな新宗教ができ上がって軍事行動を起こすとか、そういうふうなことも考えられないではないですね。フラストレーションが、同じ原因で国境を越えて広がった場合には、赤軍派とか、ああいうちょろちょろとした運動ではなくて、大規模な運動が起こる可能性もあるかもしれない。

3番目に、では問題は解決するのかということ、新宗教みたいなのは決して問題の解決にならないと思います。では現実的に飢えを解決する方法があるかということ、これはなかなか解決が難しい。しかし、現状認識はよくできる。どうやりたいかもよくわかる。しかし、方法がない。これは思想の閉塞状況と、そこにちょっと書きましたが、考えるだけでちょっと解決方法が見えてこないという、まじめな人であればまじめな人であるだけ、悩んで苦しむという、そういうのがやはり21世紀ではないかなと思います。これが私の予測です。

21世紀はだんだんそちらの方に向かっていくとして、次に、たった今の世界のあり方についてもう少し考えてみましょう。

ポスト冷戦というのが今のこの時代につけられた名前です。ポスト冷戦、今のこの世界というのはどういう状態なんでしょうか。

1989年に、ベルリンの壁が崩れました。皆さん、テレビでごらんになったでしょう。そして、80年代には、ソ連なんてまるで1000年も続くかのようにみんなが思っていたんですが、あっけなく、あっという間に壊れてしまって、なくなってしまったんですね。そして、ベルリンの壁がなくなったときに、日本はまだバブルの余韻があって、日本はこんなに繁栄していて、余り関係ないや、よその国のことだみたいな感覚もどこかにあったと思います。あにはからんや、そのおかげで湾岸戦争が起こって、その辺からけちのつき始めで、その後どんどん日本はじり貧になってきて、気がつけば、この不況、こういう状態になっているわけですね。それもこれも全部、冷戦が終わったせいだといえます。

どうしてでしょう。まず、冷戦が終わるといえるのはどういうことかということを考えてみます。冷戦の時代には、ソ連、中国、東ヨーロッパ等々を初めとして、そこは社会主義、計画経済というのをやっていたんですね。地球の半分近くが、自由主義、市場経済ではな

かったんです。貿易も余りやらない。独立でやっている。ということだと、そこは計算外なんですね。資源がそこからやってくるわけでもないし、商品がそこに売られるわけでもない。ないのと同じです。そこで、日本は残ったアメリカを相手に、アメリカの紹介で石油を買ったり、アメリカの市場に自動車を売り込んだり、そういうことをやっていたらよかったんですね。こういう垣根がパッと取り払われてしまいました。そうすると、今度は、中国もソ連も、全部仲間になります。そうすると、これは経済学で言うところの国際分業。国際分業のやり直しです。冷戦の時代には、日本が自動車をつくるのが一番うまいです。では、日本は自動車をつくって売りたいとか、テレビなんかをつくるのが一番うまいです。安いです。品質がいいです。では、日本のテレビを買おうとなっていたんですが、玉突きのように、新たな国々が国際市場に加わってくることによって、日本より安く、あるいは日本より品質のいいものをつくる国がどんどんあらわれてきました。ちょっとスーパーなんかに行ってみるとわかるんですが、衣料品なんかはほとんど東南アジアとか中国になってしまった。電気製品だって、ワイド画面のテレビなんかは、一部を日本で作っているけど、大部分は外国からの輸入品ですね。自動車だってそうならないという保証はありません。日本が今後、経済がどんどん発展して行って、大きな工場を次々つくっていきけるという保証がなくなったんですね。

となれば、どうなるかということ、企業の投資は冷え込んでしまいます。経済成長も鈍くなってしまいます。そんな暇があったら、外国に投資しようと。投資先が見つからない。では、アメリカの長期国債でも買ってあげてというわけで、日本はこの七、八年の間、アメリカの国債を買って買って、買まくっているわけですね。そうすると、アメリカはお金がダブついてきましたから、ハイテク産業か何かに投資して、アメリカの経済は調子がよくなった。また、余ったお金で香港や中国や、世界のいろいろなところに投資をしたりなんかして、調子が戻ってきたわけです。日本の株安、円安、いろいろな景気の問題の根本は、日本が今後、工業国家、産業国家として国際社会の中で第一級の地位、特等席に座っていただけるかどうかわからなくなったということでもあります。それもこれも冷戦が終わったせいです。

次に、冷戦が終わった結果、どういうふうになったかということ、まず、ソ連が超大国のいすから転げ落ちて、ただの国になってしまいました。そうすると、アメリカの一人勝ちで、お山の大将みたいになるわけなんですけど、実はアメリカは長期低落傾向にあって、昔の社会党みたいですね。だんだんじり貧になってきて、そのうちガタガタになるという

のは時間の問題なわけですね。とはいっても、世界で一番強い国なのではありますが、いかんせん、基礎体力がない。そこで、日本に湾岸戦争のときにお金を出させたり、国債を買わせたり、外国の協力を取りついたりして、一応何とかアメリカの体面を保っているという、こういう状態であります。

そうすると、問題は、このまま行くとアメリカは世界一の大国ではなくなるだろうと。それも21世紀の早い段階で、アメリカは2番目か3番目の国になってしまう可能性がある、こういうことになってきたわけですね。これはアメリカのシンクタンクが口をそろえて言っていることではありますが、あるシンクタンクの予測によりますと、2020年、世界のGNPの大きい順番、1番は中国です。何せ12億もの人間がいるんですから、ちょっと人並みの生活をただけで、アメリカのGNPの総額なんかを追い越してしまいます。2番目がアメリカ。3番目がインド。インドというのは、今、経済が高成長しているんですけども、人口が8億人から9億人もいますので、これもやはりはずみがつくと恐ろしい。4番目に日本と、こういうふうになっております。上位4カ国のうち3カ国までアジアの国ですね。ということで、20世紀、19世紀とは全然違った世界が21世紀に登場します。日本が4番目であるかどうか、私、最近怪しいなと思うようになりました。もしかしたら10番目ぐらいになっているかもしれませんね。

そうしますと、アメリカが全部を取り仕切ることが無理になってきます。どうしても、中国やインドに相談しないといけない。でも、中国やインドとアメリカの相談がうまくまとまるかという、これはなかなか予断を許さないものがあるんじゃないでしょうか。つまらないことで内輪もめをしたり、いろいろなことが起こってくる。そうすると、世界は、船頭多くして船山に上ると言いますが、船頭が増えてしまうわけですから、大変不安定になってくるんじゃないかというふうに予測ができます。

それから、3番目にナショナリズムの問題というふうに書いておきましたが、ソ連が解体した後、いろいろな民族が出てきて独立を要求したとか、中国でも台湾の問題、チベットの問題、中央アジアの問題、いろいろございまして、それから、北朝鮮も、これも民族問題の一種と考えてもいいかもしれませんが、そういう特定の民族が、力関係が緩んだのをよいことに個別に暴れ出すという、こういう現象が起こりましたし、今後も起こりやすくなる可能性がある。こういうのが21世紀であろうと思います。なかなか難しい。

そして、難問は山積しております。ざっと紹介しますと、地球環境の破壊がますます深刻になって、地球環境を守るために炭素税、これは石油や石炭に税金をかけるという意味

ですね。そういうのを新しくつくったりしなくてはならない。

2番目に、貧困の問題が解決しないので、南北の格差はますます広がっていくだろうと。これに手を打とうと言うんですが、なかなか有効な手だてがない。人口をストップするには幾つか方法が考えられるんですけども、一つは所得を向上させるということですね。年間1,000ドル以上になると、何か子供の人数が急に減るんだそうです。ということが過去明らかになっておりますので、第三世界の国々の所得をとにかく上げてやればいいんですけど、これがなかなか難しいですね。GNPが伸びていくよりも、人口が伸びていく方が年率のパーセントは高いんです。そうすると、ことしよりも来年、来年よりも再来年というふうに、どんどん第三世界の国々は貧乏になっていくわけですね。そうすると、ますます人間が増えてしまう。

もう一つの人口ストップの方法は、教育程度を上げることです。学歴が高くなると、どういうわけか子供の人数が減るんだそうです。ですから、この方が簡単かもしれないけれども、第三世界の国々にノートや鉛筆や教科書をたくさん配って、どんどん勉強して、学歴を高くしてもらおう。そうすると、人口が抑えられるかもしれませんね。これは地球にも優しいし、すべての人にとってハッピーです。しかし、第三世界の国々には、高い学歴を得ても就職チャンスがないために、みんな失業しているという現実がありまして、もしかすると、そういう人たちが、さっき言った緑の革命軍とか、そういうグループになってしまって、大使館に突入したりするかもしれませんね。なかなか難しいですね。

それから、3番目に、国際標準と文化の矛盾ということが問題になってくると思います。今、世界で統一の基準というのはいっぱいあります。大体、ヨーロッパ、アメリカが決めたものです。メートル法とか太陽暦とか、何だ、かんだ。ところが、これが自分たちのやり方と合わないということが起こります。イスラム教徒とヨーロッパ文明、これはなかなか仲が悪いわけですね。これは有名ですね。もう一つ、自分たちの文化を持っている大きなグループとしては中国というのがあって、アメリカが人権問題だとか何とか言って、言論の自由の問題で言いますが、中国は、内政干渉だとか、これが中国のやり方だとか言って、なかなか決着が付きません。そういう問題が、もっと大きな事柄をめぐって起こってくるということがあります。

4番目は、安全保障の問題も大変に難しくなってきます。核兵器というのは、冷戦時代は厳格に管理されていたんですけども、今、大変にルーズな状態になってきて、ロシアは核弾頭を外国に売っているという話もあります。そんなことになったり、ゲリラがプル

トニウムを手に入れて核爆弾をつくったりしたら、大変です。だけど、そういうことはかなり現実の問題になってきていますね。北朝鮮が核爆弾を持っているかどうかだけだって、あんなに大騒ぎをしたわけですから、もし、ある国が手に入れば、ほかの国も対抗上、手に入れなければならず、世界じゅうの国にどんどん核兵器が拡散していったら、これはなかなか難しい問題ですね。というふうな安全保障の問題も大変難しくなってきます。

こういふに、地球上ではもめごとの種が増えこそすれ、全然減っていない。これが21世紀に向かっている情勢ではないかと思えます。

世界の情勢を仮にそんなふうだとして、日本はここへ来て非常に調子が悪くなっていますが、この現状をちょっと考えてみたいと思います。

日本社会は、どうしてこんなにどん詰まり状態になってしまったんだろうか。それは、先ほどの冷戦の終わりと関係がありますが、冷戦が終わることによって、いわゆる戦後日本という、この50年以上続いてきた、私たちのなじみのあるこの社会も終わろうとしているんだということではないでしょうか。戦後日本というのは、一口で言うと、経済大国への道でした。非常な貧乏のどん底から始まって、戦後復興があり、高度成長があり、そしてオイルショックとバブル経済があり、今があります。皆さん、お子さんのころからずっと大きくになるにつれて、この戦後を生きてこられたわけですから、その折節の光景を思い浮かべることができるでしょう。10年前には、この多摩プラザの一带なんて、こんなふうな立派なものというか、何というか、こんな奇妙なものはなかったですね。ただの山だったりなんかして、そのころの方がよかったかもしれないんですが、今はこんな状態になってしまった。これも戦後の一風景であります。

経済大国。この経済大国というのは、だれかがそういう旗振りをしたわけじゃないですけども、気がついたら、みんなそういう方向に走り出していたんですね。私は思うんですが、これは戦前戦中の単なる裏返しだと。戦中のスローガンはこうでしたね。「欲しがりません、勝つまでは」。欲しがらないんです。経済は後回しなんです。勝つという大事な目的があったから、国があったから。ところが、戦争に負けてしまいましたね。勝っていないんだから、まだ欲しがってはいけないはずなんです。そこで、余りおなかがすいて、みんな、もうそういうのはやめにしたんですね。やみでも何でもいいから、ちゃんと家族のため、自分のために食糧を手に入れよう。食糧が手に入ったら、服を買おう、家を買おう、教育に投資をしようというふうにして、飢えてひもじいというこの実感は信用できる。国が言うことは信用できない。だから、おなかが何とかいっぱいになりたいという、

この実感で生きていこうではないかと。先ほどの物を考えるということと言いますと、身の回りのことから考える。現状は認識できますね。物が無い、貧乏だ。欲望も認識できますね。もっと経済が豊かになりたい。そこに話を極限して、社会のこと、宇宙のことは置いておいて、身の回りのことから出発する、これが経済大国の原点だったと思うわけです。だれでも、追い詰められれば、そういうところに行くと思いますから、これは当然の考え方だったかもしれない。そのおかげで、日本のお父さんたち、おじいさんたち、お母さんたち、おばあさんたちの努力によって、日本は極めてわずかの間に目まぐるしく復興して、戦前のレベルを凌駕して、そして経済の面では世界一の一流の国と言われるまでに復興しました。これはもう一つの戦争ですね。

ところで、ここに落とし穴があったわけですね。物質的に豊かになれば解決するという経済大国への道は、豊かになった途端に、次に何をしたらいいかがわからなくなる、こういう構造にあるわけです。それはそうですよね。物質的に貧しいから問題なんだ。豊かになりたい。こういう動機で経済大国になったとしたら、自分が豊かであったら、次に何をしたらよいか、当然それはわかりません。そこで、一つの考え方は、もっと豊かになればいいんじゃないかと。もっと豊かになるといっても、何でもありますね。そこで、では、隣の人と違って、少しだけ豊かであるということに納得させればいいんだというわけで、ブランド物を買ってみたり、ちょっと外国の方へ旅行に行ってみたり、それから、ひと味違うコーヒーを飲んでみたり、いろいろそういう豊かさを自分に信じさせるためのゲームというのを一生懸命やったわけです。これが80年代ではないかなと思います。ここが大体もうそろそろけちのつき始めで、豊かになったところで国家目標を切りかえて、もう豊かになったから、最初のステージは済んだ。次に、では日本をどういう国にしたらいいか、ここでみんなで考えようではないかというふうになればよかったんですけども、そういうふうにならないで、電通あたりが頑張っていて、いろいろなコマーシャルを余りテレビでやったために、そういうふうにならなくなったわけですね。というわけです。

そうすると、どうなるのでしょうかということ、この経済大国の中で一番大事だとされていたのは、個々人の欲望です。個々人の欲望がないと商品は売れません。欲しがりませんと言いますが、欲しがりますですね。それはいいわけです。ところが、この欲望というのは、本来、自分を満足させるためのものですけども、幾ら物を欲しがっても、それが手に入っても、次々にそれが古くなってしまったり、新型が出てきたり、隣の人がもっといいものを持っていたり、この欲望には果てしがない。本来ならば、この欲望をコントロールする

自分の主体性というものがなければいけないんですけども、そういうものを訓練されていたわけじゃないんですね。みんな横並びで、隣の人欲しがらるから、みんなが持っているから、あるいはみんなが持っていないから、これが欲しいと、こういうことでしかなかったわけですね。

個々人にしてみれば、欲望の赴くままに行動するしかありません。そして、この欲望には限りがありませんから、裏を返せば、いつでも不満です。まだこれが手に入っていない。もっといい目を見ている人がいるということで、自分に自信が持てません。そして、その欲望を取り去ってしまったら、自分が何のために生きているのか、どういう意味を持って存在しているのか、こういうふうなこともわからない。そういうことは、考えるだけ面倒くさい。というので、みんなですることはなるべく口にしないようにという無意識の圧力がかかっていたと思います。特に80年代ですね。そういうのは根暗とか呼ばれて、もっと明るく、表面で生きていくのがいい、こういうふうに言われていたわけですね。

社会の方はどうかといいますと、経済大国の実体というのは、図体がどんどん大きくなっていくという、それだけでできていますから、そこでは、現状維持、既得権、惰性、こういうものが原理になります。予算で言えば、一たん手に入ってしまった何とかの補助金というのは、次の年も使わなくてはいけない。要らない道路でもどんどんつくってしまうわけですね。それから、給与でいいますと、一たん何万円という月給をもらうと、次の年には昇給しなくてはいけないわけですね。働いているかどうか、会社がもうかっているかどうかとか関係なしに、どんどん右肩上がりでも増えていく、こういう考え方になっていきます。そこでは、要らないものをそぎ落としたり、新しいことをするので全部一から作り直そうとか、そういう構想力というのは、とりあえず働かないで、どんどん今までのやり方で、ただスケールが大きくなっていけばいいと、こういう考え方になったんじゃないでしょうか。

というわけで、経済大国の次の段階に、新しい制度をつくり出す言葉もなかったし、そういう言葉をしゃべる指導者もいなかったし、そういう指導者を支持する人間たちの動きというのもなかったのではないかなと思います。これが経済大国の簡単なスケッチで、皆様、恐らく十分ご存じのことだと思うんですが、さっき「欲しがりません、勝つまでは」の裏返しだと言いましたが、戦前の裏返しだと思います。ということを実証するために、ちょっともう1回、戦前のことを復習してみましょう。

戦後教育によりますと、戦前は間違い。戦後は、明るい平和な新しい民主主義の夜明け

ということですね。善と悪になっていて、違うものとなっています。私に言わせると、戦前が間違っていたのなら、戦後は間違っていたと思います。なぜなら、表裏だからです。戦前が間違っていたということは、皆さんよくご存じですね。そこを、私、一步踏み込んで分析してみました。戦前の日本というのは、一応、近代社会、産業社会なんですけれど、ヨーロッパ、アメリカと大変違った部分がありました。それは天皇制ということですね。天皇制という何だかわからないので、私はこういうふうにかえします。戦前の社会の秘密は、国家を神聖なものとしたこと。ここにありました。

という、ちょっとまだわかりにくいと思います。今、ヨーロッパと比べます。ヨーロッパの社会、キリスト教の社会では、国家は神聖でも何でもなくて、世俗のものです。神聖なもの、神に関係があるもの、魂に関係があるもの、人間の本当の価値や美しさに関係があるもの。これは宗教、教会なんですね。教会と国家はきちんと分離されています。国家は世俗のものです。税金を集めて、公共事業をやったり、警察や外交や軍事をやったり、それだけのものです。それ以上でも、それ以下でもない。人間の心の問題は、一人一人が解決します。あるいは、教会がやっています。日本には教会がない。そのかわりに国家を教会にしたのです。これは大日本帝国憲法の秘密ですね。あるいは、靖国神社の秘密です。あるいは、天皇の秘密です。国家のリーダーが、同時に日本人の心のリーダーであり、道徳、教育勅語とか、そういうものの与え手であり、近代化の旗頭だったんですね。国家が何でもやってしまうんですね。国家が神聖なものとなる。ここが戦前の体制の一番の根本ではないかと思えます。ですから、大日本帝国というのは世俗の国家であると同時に、教会、つまり神道の総元締め、国家神道ですね。ということであり、そして天皇は現人神であると。そういう奇妙な体制で、この前の戦争をやっていたし、日本人も生きていたわけですよ。ここがどれだけ国際標準から外れた、へんてこな考え方かということをよく認識した方がいいと思うんですね。

1分間だけ脱線すると、これとよく似た国が、今、一つありますね。さっきからちょっと何回か名前が出た北朝鮮なんですけれども、私は去年、北朝鮮に行ってみまして、非常に驚いたのは、何て日本に似ているんだろうと。金日成の絵があちこちに飾ってあるんですけれども、まるで戦前の講談社のよいこの絵本と同じような、にこにこした子供が稲刈りか何かしている状態なんですね。そして思ったのは、金日成というのは天皇だと。北朝鮮というのは、戦前の日本の天皇制と全く同じだと。だから、金正日というのは、皇太子だから世襲になったんだということで、ああというふう思ったんですが、今、私たちは

北朝鮮を見ると、何てばかなことをやっているんだろうと、いろいろと思いますよね。農業の問題とか。だけど、北朝鮮は、言ってみれば、高度国防国家で、当時のA B C D包囲網というのと同じ、ああいう精神状態なのではないかなと。翻ってみると、北朝鮮がばかみたいに見えるんだとしたならば、戦前の日本も同じだし、そこを脱し切れずにいるとしたならば、戦後日本も同じだと、こういうふうに深く反省したわけでございます。

話をもとに戻しますと、そうすると、国家が神聖なものであるとどうなるかということ、個人は神聖なものではないですね。個人よりも国家が優先する。赤紙一枚来たら、家族がいようと、大事なことがあろうと、軍隊に行かなきゃいけない。これは神聖な義務だと。税金も払わなきゃいけない。何だ、かんだ、こういうことになりますね。社会よりも、民間よりも、国家や軍が優先するという、こういう奇妙なことになります。これは、欧米の民主主義社会、近代社会とは大変違う体制ですね。

そうすると、どうなるかということ、戦前の日本社会で、私個人として生きていたとします。そうすると、個人の主張するということとはとてもやりにくい。もし私が、国が間違っているとか、政府のやり方がよくない、こういうふうなことを言おうとしますと、どうしても自分はそう考えると言わなければなりません。そうすると、どうなるかということ、周りの人が、おまえは非国民だとか、おまえは国家のことを考えていないとか、おまえは自分のことしか考えていない、こういうふうに言われてしまいます。そこで論争になる。勝ち目ないですね。どうしてかということ、私が、国家、社会、公共のものにつながっていくのは、みんな天皇の名前においてつながっていくというふうになっていますから、私が自分の意見を言った途端に天皇の意見と対立してしまうんですね。天皇の意見と対立してしまうと、これを最後まで主張していくということとはとても難しくなってしまいます。というわけで、戦前には本当の意味での言論というものが成り立ちにくい構造になっていたと思うわけです。

本来、ここで共同性ということと公共性ということを言葉として区別したいんですけど、共同性というのは、とりあえず、自分が所属している集団を大事にするということです。うちの会社、私はたまたまこの会社にいる。そうしたら、この会社は私の仲間だから、これは大事だ。うちの学校、うちのクラス、それから、本当の自分の家庭。これはよその家庭より大事に決まっているわけですね。皆さんだれでもそうでしょう。こういうふうに、自分が所属しているところを大事にするというのが共同性というふうに言います。

そうすると、その一方で、これをはみ出していくということが当然大事になります。うち

の会社は大事です。でも、うちの証券会社は、利益の付け替えとか何とかということをやっている、犯罪行為をやっているわけですね。ここで大変悩みます。もし、自分の会社だけが大事だったなら、それは黙っているのがいいでしょう。しかし、世の中、もっと多くの人たちの構成とか、市場のルールとか、そういうことを考えるんだとしたら、自分の会社ではあるけれども、間違いだというふうに大きな声で言うのが正しいでしょう。ということで、その会社を越えていくというのを公共性というふうに言います。

この2つは本当は違うことですね。親が間違っている場合もあるでしょう。子供がそういうことを考えると、一歩公共性の場所に踏み出しますね。自分の学校以外にも、もっといい学校がいっぱいあるということがわかると、これは共同性から公共性へ出て行っているわけですね。自分の会社もワン・ノブ・ゼブであると。そこに全身全霊をあげたりしないで、会社はかわってもいいじゃないとか、こういうふうに思うと、公共人として活動していることになるでしょう。

この区別があるということは、とても大事なことですけれども、戦前ではこの区別を打ち立てられなかった。軍隊というのは、独自の利害を持っています。単なる共同性です。でも、それが国家の名前で勝手に戦争してしまう。これは軍隊の共同性が、日本国という共同性とごちゃごちゃになってしまっているというわけですね。太平洋戦争、大東亜戦争というのは、そうやって始まったんじゃないですか。こういうことがあると思うんですね。

そういう共同性と公共性が区別されていない。言い換えると、個人が公共のためにこうであるというふうに自分の責任で発言する、こういう習慣が余りない。というのは戦後社会にも共通していると思うんです。ここは戦前も戦後も全く同じだと私は思います。これが戦後社会の負の遺産ということが言えると思います。

さて、もう一つ、戦後社会を解く大きなかぎはアメリカの存在です。アメリカは日本の背後霊というか、守護神というか、何と云えばいいか。戦後日本というのは、アメリカ抜きには語ることのできない存在です。どうしてかということ、何で戦前の日本は戦後の日本になったんでしょう。それはアメリカと戦って負けたからです。アメリカと戦って負けたから、天皇制は終わりになって、国家は世俗のものであると言われてしまって、そして戦後日本が始まったんですね。戦後の日本人は、国家が世俗のものになったからびっくりしたわけですね。天皇も人間であると言われてしまいました。そうすると、どうしましょう。どうしても、自分を越えたものが何か欲しいです。とりあえず、では、それは会社だ。そ

ここで、会社のために一生懸命働いてしまう。これは日本株式会社ですね。経済大国への道ですね。こういうふうになっているんじゃないでしょうか。

というわけで、戦後日本のあり方を選んだのは日本人ではないのです。半分以上というか大部分、アメリカ人が戦後のあり方を決めてしまった。ところが、このことを日本人は素直に認めるのが難しいですね。心理学でダブル・バインドというのがあるんですけども、あるお母さんがいて、子供がなかなかつかないで子供にこう言います。「お母さんのところにいらっしやい。お母さんは怒らないから、怖くないから、いらっしやい」、非常に怖く言うわけですね。そうすると、子供としては困ってしまって、お母さんが怖くないというのでそばへ近寄って行こうと思っても怖いわけですね。でも、近寄って行っても危険だし、近寄らなくても危険である。非常にどう行動したらいいかわからなくなってしまふ。これをダブル・バインドと言います。

日本の状況というのは、アメリカにこう言われたわけですね。日本は平和で民主的な国だから平和憲法をあげよう、おまえは民主的な国ですと、こう言われたわけですね。民主憲法、平和憲法を押しつけられた。何でアメリカにそんな力があつたかという、戦艦ミズーリとか東京湾に浮かんでいて、軍事力があつて、戦争に勝つて、それだけの実力があつたからです。実力を背景にして何かを押しつけるなんて、民主主義的なことですか。そうじゃないですね。その反対です。でも、そういうふうなものを無理やり押しつけられて、しかも、民主主義で、何でも話し合いで決めて、多数決で決めなさい、こう言われてしまったわけだから、もし民主主義ということを実際に理解すると、アメリカに押しつけられたという実態を受け入れられなくなります。アメリカの押しつけをそのまま受け入れてしまつと、今度、民主主義はうそだと思ふしかなくなるわけですね。というわけで、戦後民主主義というのはどこかうそくさい。自分で選んだものじゃないからですね。こういうことがあると思います。

そこで、押しつけられた平和憲法は、押しつけられたけど、平和憲法だからいいよという、革新になる、護憲勢力になる。中身はともかく、押しつけだからよくないよという、保守派、あるいは右翼になる。これで、何だかんだ、ごちゃごちゃやっているというのが、大体、戦後の言論界の構図だったわけですね。アメリカが与えた戦後の秩序をどう理解するか。それをめぐって、二つの軸が分かれていた。しょせんは、コップの中のあらしだったとも言えます。

しかし、こういう決着のつかない問題を幾ら考えてもしょうがないので、と思った

学校秀才たちが、戦後のリーダーたちになっていきました。彼らはこういう論争に余りかわらわずに、試験でいい点をとって、それで大蔵省や一流企業に勤めて、それでだんだん、大過なく勤め上げて、気がついたころには定年間際に事務次官になったり、専務取締役から社長になったりと、そういうふうな人たちなわけなんですね。

こういう人間類型というのは、自分では何にも決断しないし、責任もとらないという特徴がありますね。日本のリーダーをそんなに何人も知っているわけじゃないですけど、中には、もちろん立派な方もいらっしゃるんですが、人間類型として、大ざっぱに言うと、子供っぽい、幼稚だ、社会経験が足りないということがあります。そして同時に、いやに利にさとく、悪知恵にたけていて、しっぽをつかまれないように、せこい悪いことを結構するという、こういう人間類型になってしまっているわけなんですね。昔はこうじゃなかったと思いますよ。つまり、明治時代の日本人というのは、こんなせこい人間ばかりじゃなかったと思うんですけども、戦後の日本人というのは、こういう人間を量産する傾向があります。

こういうリーダーしかいないところで、一番大事な、そして戦後の曲がり角と言われている今の時期に、日本を正しい方向に引っ張っていくなんてなかなか難しいと思います。それは、日本の組織における意思決定の不在、物をちゃんと決められないということだと思ふんですけども、まず、政治家がいません。政治家というのは、こういうプランと、こういうプランがあるけれども、私はこちらのプランがいいと思う、国民の皆さんはどうですかというふうに聞いて、国民に支持されて、支持されたから、ではこのプランをやしましょう、全力でそれを実行する、これが政治家ですね。ところが、日本の政治家というのは、国民のことなんかはどうでもいいわけで、とりあえず政治家集団、自民党の中で仲間を集めて、ボスになろうと、こういうふうなことで動いているわけですね。それが派閥であり、陣笠議員であり、そして族議員であり、そして政治資金を裏からこっそりたくさん集めれば集めるほど仲間は増えるわけですから、そういうタイプの人しかボスにならないようになっていますね。そして、何か大事な決定があると、すぐワシントンに電話をかけたり、それから、黒幕の大物やキングメーカーと呼ばれる人のご意見を聞いたり、そういうふうなことしかできないというわけです。

もう一つ、戦後日本の一番の欠陥は、資本家がないことです。これはちょっと変に聞こえるかもしれませんが。自由主義市場経済は資本主義とも言います。資本家が威張っている経済が資本主義経済のほうです。しかし、日本に株式会社がたくさんあるけれど、資本

家はいない。

どうしてかという、日本の株式というのは、ほとんどが法人所有だからです。会社が持っているんです。個人が持っていないんです。例えば、Aという会社はBという会社の株を持っている。Bという会社はCという会社の株を持っている。Cという会社は、Aという会社の株を持っているんですね。8割が法人所有だと言われています。8割ということは大部分ですから、個人投資家とか資産家が持っているとか、そういうのはほとんど無視できます。そうすると、財閥とか企業グループとかというのがありまして、そういう社長さんたちが集まって話をすれば、企業グループのことは大体決着がついてしまう。しかも、その経営者というのは、さっき言いましたように、学校秀才で企業に入って、そのまま上に上がっただけの人で、個人資産もなく、ただのマネジャーですね。そういう人が企業グループを動かしているという実態があります。

昔は、資本家が何でも決めていて、それから、資本と経営の分離というのが起こったんですね。資本家というのは、安楽いすに座っていて、経営者が一生懸命働く。これが近代資本主義ですけど、日本は、資本と経営の分離ではなくて資本家の消滅ですね。経営の独り歩き、これが戦後の経済界の実態であると思います。

そうすると、どうなるかという、経営者というのは、本来、利潤を追求して、資本家に1円でも高い配当をあげるために、まじめに会社を経営するんです。資本家がいなかったらどうなりますか。無責任になるでしょう。利益なんか上がらなくてもいいんです。配当が低くても問題を言いませんから。そうすると、自分のことがとりあえず大事。そして、社員のことがとりあえず大事になりますから、会社から文句が出ないようにシェアを多くして、売り上げを伸ばして、会社のポストを増やして、昇進に差し支えないようにして、部長が足りなければ、部長格とか部長付とか部長待遇とか、そういうのをたくさんこしらえて組織を水膨れさせて、本来、資本家がいたら、こんなの怒りますよ。給与のむだ遣いだとか、管理職を半分にしろとか、たちまちそういう経営者は首にされてしまうんだけど、資本家がないから、こういう企業の経営者による乗っ取りというのできるわけですね。そして、余り利潤が上がらない、生産性の悪い企業というのが維持されている。お互いに余り競争がないように相談するわけです。建設業界なんて、これは一番いい例でしょう。談合ですね。建設業界だけではなくて、なぜか、不思議に値段が一致しているビール業界なんていうのから始まって、競争がないようになっているんですね。競争がないようになっているんですけど、業界団体というのがあって、厳しく取り締まっている。業界

団体の申し合わせに反したりなんかすると、社長といえども業界団体に呼びつけられて、こっぴどくしかられたり、さらに監督官庁から電話がかかってきて、君々、業界秩序を乱してはいけませんとか、そういうことを言われたりするんですね。自由競争でも何でもありません。これが、日本株式会社と呼ばれるものの実態でしょう。最近、またその一たんが明らかになっていますけれども、近代資本主義とは似ても似つかないものですね。これが共同性がばっこしているという、日本社会の実態です。

こういうふうな政治家の不在、資本家の不在、そうしたら、だれが意思決定すればいいですか。企業のことは、企業人が自分で決められない。業界の動向とか監督官庁の意向をまず聞こうとします。政治家は自分で決められない。国民の前に選択肢を提案できない。そうすると、選挙は何かやり過ぎて、あと、党内事情や政治献金の有無とか、アメリカの意向なんかで大体決めてしまいます。そんなんだったら、だれだってリーダーができると思います。

というのが、日本の意思決定能力のなさです。こういうあたりが外国に見透かされて、日本は信用できない、人間一人一人が信用できない、社会のメカニズムが信用できないというわけで、日本に投資をするのは手控えよう、日本を今後パートナーとして選んでいくのをちょっとやめようかと。こういうふうに、アメリカを初めとする外国が思い始めたということが、ここ10年ぐらいの特徴ではないかというふうに思っております。

さて、最後のセクションをお話します。

今までのところは、先ほど申しました現状認識、あるいは予測、ここで世の中がどんなふうに進んできたのか、動いているのか、動いていくのかというお話でした。これで、何を考えればいいのかという結論になるとすれば、では、私たちはそれを踏まえて、一体何をしたいのか、これを私も、そして皆様方お一人一人もしっかり認識する、ここが大事だと思うわけです。そこを認識しましたら、おのずから、何を考え、そして何をすればいいか、どう行動すればいいかということがわかるはずですね。そのとおりになるかは別として、少なくとも方針が立ちます。方針が立てば、自分の人生というか、生き方というか、それが組織立てられて、一つの見通しが出てきます。これが大事だと思うわけです。これが価値観というものだと思うわけです。

まず、私が思いますのは、私たち人間、日本人一人一人の個人としての生きやすさを追求しよう、追求したいということです。ここで言う生きやすさというのは、自分が欲しているものが手に入るとかという意味ではないです。自分がこうしようと思ったらこう

できる、ああしようと思ったらああできるということです。この反対は管理ですね。残念ながら、今の公立の——私立もそうかもしれません——小・中学校というのは管理に走っていて、学校の校則とか厳しいですね。スカートが何センチだとか何だとか、どうでもいいようなことばかり細かく注意して、一番簡単なことはほうっておく。つまり、学力がどれぐらいあるかなんていうことは、ちっとも伸ばしてくれないわけです。そういうことじゃなくて、個人個人の生きやすさというのを追求しなくてはいけないんじゃないか。それには、いろいろな人間がいていいんだというふうに私たちがはっきり割り切って、自分が自分の生きたいように生きるのであれば、ほかの人がほかの生きたいように生きるということを邪魔しないようにする。それは時々目ざわりである可能性もあるんですけども、そこをはっきり割り切ることが必要なんじゃないかと思います。

日本では、あるグループや組織を管理する場合、集団として管理しようとしています。1000人生徒がいたら、1000人が同じような服を着たり、行動したりするように、校門のところで先生が立っていてチェックしたり、全体として成績がこんな分布だからとか、集団として管理しようとする。個人個人が自分を管理する能力を信用していないんですね。必ずだれかが、集団として外から見えていないとだめだというふうに考える。これをひっくり返しましょう。集団としての管理はなるべくやめて、そうじゃなくて、個人個人が自分の行動をコントロールできる能力を身につけるようにしてもらおう。これを教育の目標にしたらいと思うんです。

例えば、学校の校則みたいなものを考えてみます。ある集団を管理しようと思うと、その集団独自のルールというのを決めて、みんなに押しつけなくてははいけません。でも、それは管理のために生み出したものですから、何の理由もない。例えば、スカートの長さなんて、学校で勉強することとほとんど関係がないんですね。でも、学校がごちゃごちゃだと困るような気が、先生はするわけです。何かいろいろな子がいたら学校が乱れているような気がするので、規律ある学校にしたいというので、目に見える、例えば制服なんていうふうなものを持ってくる。そうすると、個人個人にとってみますと、自由がなくなってしまう。

例えば、日本では、茶髪なんていけないことになっていますね。それは、日本人がみんな髪が黒いからですね。私の娘はインターナショナルスクールにたまたま行っているんですが、そこでは茶髪なんて問題はないですね。ほとんどの子は茶髪ですから。そこでは、子供が一人一人違うのは当たり前というふうになっていますね。父兄会の通知なんか、ど

んなことを学校で決めるのも、必ずパーミッション・スリップ、つまり、親の同意というのが来るんですよ。例えば、今度遠足に行きますけど、あなたのお子さんは参加しますかなんていうふうに来る。参加するというサインがないと、参加できないんですね。こういう映画を見ますけど、映画を見てもいいですかと。参加するというサインがないと、その子だけは、映画は見せられないんですね。一人一人の子供について集団活動するかどうか、許可を求めます。一斉に動いていますけど、それは個々人の決定の積み重ねですね。

例えば、どうしてかという、給食のときなんか、ベーコン何かとかいうのを出すけれど、これを食べさせていいか、そういうことを聞きます。ムスリムの子供がいるからです。そうすると、一斉にみんなに食べさせるなんていう場合は、食べられないものがあります。だから、当然それは食べなくていい。それから、服装なんかでも、チャドルというのをムスリムのお嬢さんはかぶるでしょう。これは学校の制服と違うんですね。だけど、宗教上の規定が優先するから、教室ではチャドルをちゃんとかぶっています。そういうふうに家庭の教育や宗教、そういうことがいろいろあって、いろいろな子がいて当たり前、こういう運営方法です。これを日本もまねしたらいいと思うんです。

そういうことなんです、個々人を縛るルール、これは物を取ってはいけないとか、学校で授業時間中に黒板に落書きをしたらいけないとか、どうしても学校が成り立たなくなってしまうような根本的なルール、これはなきや困るけど、そういうふうに必要性が証明されたルール以外のもの、守る必要があるかどうかは疑わしいルールは、全部なくしてしまったらいいと思います。これを、ルールのミニマリズムと言います。そうすると、一人一人の自由の余地は増えます。

それだけじゃなくて、個々人の違いというのをもっと支援するシステムが必要なんじゃないでしょうか。日本ではよく、逆上がりができないので、逆上がりができるように、全クラスで頑張りましょうと。A君、まだできませんね。じゃ、周りのみんなで拍手しながら応援しましょうとか、そういう教育をしているのがいて、私は逆上がりができなかったら言うわけじゃないんですけども、そんなことになったら、これは地獄の苦しみだと思います。そうじゃなくて、Aさんは逆上がり得意なんですね、よかったですね。B君は字を書くのがうまい、よかったですねと、こういうふうにそれぞれの子供の特徴のあるところを褒めていくということで十分であって、何かみんなできないといけないという、そういう連帯責任のようなものは、これは大変にまずい方向だと私は思います。それはやめたらいい。横並びではなくて、差異を支援するということがとても重要ですね。

この横並びというのは、今、日本じゅうに蔓延していて、例えば、税金でも、ちょっと何かもうけたりなんかすると、ガボッと税金を取ってしまう。なるべく収入が平均になるようにという考え方でできているとか、それから、例を挙げると切りがないんですけども、そういう結果の平等に行き過ぎです。そうじゃなくて、チャンスはだれにでも与える。チャンスを生かすかどうかは個々人の問題で、結果は少しぐらいばらつきがあってもいいじゃないかと、こういうふうには考えないと、自分の人生に責任を持って生きていくという、個々人の自主性が損なわれてしまうんじゃないかというふうに思います。

これは人間を大事にするということの意味なんですけど、2番目に私が言いたいのは、日本の組織は本来の機能を取り戻せということです。ちょっと抽象的ですけど、例を挙げると多分わかりやすいですね。

まず、市場経済は本来の機能を取り戻してほしい。銀行は何をやっているんだと。銀行は、土地を担保にして金を貸すのをやめなさい。土地を担保にするというのは、貸し倒れになったとき土地を売ればいいという考え方なんですけれども、これが非常に日本の経済をねじ曲げています。あるいは、外国の企業が日本に入って来れない参入障壁ですね。そうじゃなくて、銀行はリスクを背負って、将来性がある採算がとれると思った事業をよく審査して、そこに投資しなさい。そしたら、ベンチャー企業が育つんです。そして、採算性がないと思ったら貸さなくていい。銀行マンとしてのそういう義務をちゃんとやりなさい。土地の担保があれば金を貸すというのだったら、私だってあしたから銀行員ができるのではないかと思います。銀行にはそういう文句がありますね。これは一例ですね。

証券会社には、ちゃんと情報を開示して、リスクをわかりやすく、公平なルールでやってほしい。ごく一部の顧客に所得保証とか利回りを保証するなんていう、ああいうとんでもないやり方というのは、証券会社のやることではないですね。証券会社が証券会社としてのルールをきちんと守っていないという、そういうプロフェッショナルとしての誇りが無いという点が問題です。これが証券業界の慣行であったとしたら、これはとんでもないことですね。みんなどんどん監獄にぶち込むしかありません。

3番目に企業です。一般企業も、粉飾決算なんかはしょっちゅうやっているわけですね。証券会社に頼んで、今期の業績が赤字だ、どうしても黒字にしたい。では、手持ちの株式をちょっと売ろう。手持ちの土地をちょっと売って、表面上黒字になったように見せかける。こういうのを含み資産というわけでしょう。含み資産というのは、今日の会計法上の責任もあるんだけど、企業がもうかっているのか、もうかっていないのか、そういう

ことをきちんと表現するという、そういうルールに違反しています。こういうルールに違反していたら、みんな安心して株を買えないじゃないですか。そうしたら、法人投資家ばかりになってしまう。こういう資本主義の基本原則が守られていない。

それから、ベンチャー企業を育成するということも必要でしょう。これはアメリカみたいに創業者利得を認めて、例えば、私がある会社を興したとする。最初の10人、最初に投資してくれた私の本当の友達、株券を配って、これが100倍、1,000倍になったら、大金持ちにしてあげましょう、税金は少しおまけしましょう、こういう方法が大切です。次に来た100人は、資産が100倍になる可能性もあるけど、すっからかんになる可能性もあるけれども、それなりにもうかる。その次に来た1万人は、まあまあもうかる。その次に来た100万人は普通にもうかる。こういうふうに、早く投資すればするだけ非常にもうかるというシステムにしておけば、新しいアイデアを持っている企業家のところにほかの投資家がお金を集めて、日本で新しい、業界の談合にとられない企業がどんどん育っていく、こういうふうに思います。国はそういう政策を支援した方がいいです。アメリカはとくにそれをやっているわけですから、日本もやったらいいと思います。

次に官僚機構ですけども、簡単に言いますが、許認可行政とか、そういうのはさっさとやめて、それから、権限を地方に委譲した方がいいです。政治は、小選挙区制というのをせっかく取り入れたのに、比例区という妙なものがくっついていまして、あれはさっさとやめ、それから、私は次点歳費ということを提案しているんですが、小選挙区とは2人のうち1人しか通らなくて、もう1人の人が次点で落選してしまいますね。この人に、次の選挙でもう1回立候補してもらって、現職をおびやかしてもらいたいわけです。現職をおびやかしてもらって初めて、現職は緊張するというわけです。今、小選挙区が300あるんだったら、2つ一緒にして小選挙区を150にし、議員定員を半分にするかわりに次点の人にも歳費をあげればいい。そうすると、与党が失政をした場合、次の選挙でごろっとひっくり返って、野党が与党になるという政権交代が起こりやすくなると思います。これが小選挙区制の最大の利点なんです。それが政治が機能するという意味ですね。今みたいに新進党がだらしなくて腰砕けになってしまっただけは、また、自民党の長期安定政権になってしまっただけで、何をやっているんだということになります。

それから、ジャーナリズムですね。これがまただらしない。まず、記者クラブをやめろ。それから、新卒を採用して、サツ回りでだんだんたたき上げて記者にするという、今の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞のやり方をやめなさい。それから、全国紙はやめて、プロ

ックごとに独立したり、要するにもっと部数を落とさない。そして、記者は地方紙に入って、それから、自分の書いた記事でたたき上げて、中央紙にセレクトされるという、こういう競争システムにした方がいいというふうに思います。

それから、電通という、広告を取り仕切っているでっかい会社があるんですが、あれが自民党とか政権に通じていて、ジャーナリズムに圧力をかけるということが問題になっています。電通を何とか解体しよう。こういうふうなことがあります。

それから、教育ですね。だんだん時間がないので、ちょっとはしよりぎみに申し上げますが、学校は自由化するということが非常に根本です。親が、あるいは子供が、行きたい学校を選べる。それから、学校の側も生徒を選べる。つまり、やめさせることもできる。こういうふうにお互いに選び合うということがあって初めて、緊張関係が生まれます。今みたいに、学生が学校を選べない。子供は人質だ。それから、どんなにできが悪かったり、暴れたりしても退学にできない。こういうことでは、管理を強める以外に方法がないです。管理しなくて済むんだらば、本当に暴れてしまったら退学だと、こういう制裁手段がなくてはいけない。よその学校に行けばいいんです。こういうふうなめり張りというのをつけて、教育機関を教育の場として再編することが必要です。今、公立の学校というのは学力を伸ばす場所じゃないですね。学力は塾、予備校で伸ばすわけであって、公立というのは、昼間休む、友達と会いに行く場所ですね。これは学校として、大変異常な姿です。

それから、大学のことがあるんですけど、ちょっとこれは飛ばしましょう。

それから、次に申し上げたいことは、そういう個々の政治改革から始まって、いろいろな改革の問題というのがありますが、これを課題として提起する、言葉を大切にしよう、日本語を練り上げよう、こういうことを私はとても言いたいと思います。

一番大事なのは、これからの時代、普通の日本語で、すべての問題を考えることだと私は思っています。普通の日本語、片仮名じゃなくて。それから、フランスからかりてきた、こなれない言葉じゃなくて、大多数の、普通の日本人が普通にわかる、普通の言葉で物を考えて、それを発表する、討論する、こういうことがとても大切だと私は思います。今まではそれをやってこなかった。つい、横文字の何とかジェーションとか、そういう片仮名でごまかす。困っていたら、漢字でごまかす。こういうごまかすということをプロはやってきたんですね。そうじゃなくて、手持ちの材料を全部明らかにして、これだけのことを考えましたということで、一般の聴衆やほかの思想家と討論する、こういう習慣をつくっていかないと、言葉が国民の共有財産になっていかないとこのように思います。

そして、言葉どおりに行動する。これが一番大事なことです。親として子供を教育されているときに、言葉どおりに親が行動しないと子供は親を信用しなくなって、ごちゃごちゃになってという、いろいろそういう体験をされていらっしゃると思いますが、家庭の中のことは社会でも同じで、政治家が、ジャーナリストが、科学者が、言葉でこういうふうに保証したら、それに責任をとって、そのとおりに行動する。これは基本だというふうに思います。

それから、私たちの社会がどのような過去の上に成り立っているかという、歴史について目を向けていくということはとても大切です。きょう、こちらに来る途中に、多摩丘陵が切り開かれて、住宅地が並んでいるという状態を見て、私が思ったのは、これだけ過去と断絶して、新しい建物で、歴史がないところにやってきてしまったら、一見、生活は快適だろうが、多分、精神的なストレスがとても多いだろうなど。例えば、ノイローゼとかいろいろな精神疾患が、普通の住宅地よりもたくさん発生するだろうなというふうに思ったんです。そして、この状態というのは、現在の日本の象徴だろうというふうに思います。日本自身が戦前から断絶し、戦前がなかったように思い、明治維新から断絶し、江戸時代がなかったように思い、過去からの遺産を次々忘れて、しかし、それに呪縛されている、こういう状態があると思うんです。それと直面するために、もう1回、歴史に興味を持つのではないかと、それを私は次に言いたいと思います。

そういう仕事をしていらっしゃる方で、加藤典洋さんという方が、ことし『敗戦後論』という大変重要な本を書いたんですが、もう時間がないので申し上げませんが、こういう問題をもしてお考えの方がいらっしゃいましたら、お読みくだされば、きっと示唆が多いというふうに思います。

それから、過去に目を転じると同時に、世界の多くの国々、多くの人々の考え方、特に宗教が大切だと思いますが、そういうものについて深い関心を寄せるということが大事だと思います。日本人は、宗教を理解していないくせに軽蔑しています。これは大変危険な態度で、外国の人々から見ると、とても受け入れがたい、けしからん態度に見えるわけなんですけれど、そういうことで宗教に対する理解と敬意というのを持つことが必要ではないかと思います。

その上で、21世紀を考えるキーワードを三つご紹介したいと思うんですが、一つは、アジアということです。日本は、アジアの一国であった1000年以上の歴史がありながら、アジアのことを忘れ、アメリカとヨーロッパに標準を置くという近代化を120年や

ってきましたが、歴史の針はぐるっと回って、また、アジアの時代が始まりました。そこで日本は、貿易も投資もアジアに比重を移しているんですけども、過去の歴史があるために、アジアに帰っていくことがとても難しいわけです。鳥と獣が戦争したときに、翼があるから鳥ですとか、毛が生えているから獣ですとかと言って、行ったり来たりして、最後に仲間外れになってしまったコウモリの話がありました。日本は資本主義だからヨーロッパと同じですとか、顔、形が似ていて、漢字を使っているからアジアですとかと行って行ったり来たりしているんですけど、このままだと、どちらからも相手にされなくなる可能性があります。アジアということと直面するということが大事ではないでしょうか。

2番目は、科学技術、特に科学です。これだけ価値観が多様になり、世界がばらばらになろうとしているときに、共通のキーワードというのは幾つありません。その一つが科学です。科学というのは、世界じゅうで同じです。どの民族、だれが実験しても、結果は同じです。科学とよくつき合い、科学を基礎にして社会を組み立て、知識を組み立てることが、この時代に一番大事なことです。科学に対する尊敬と敬意を取り戻すことが大事ではないでしょうか。オウム真理教を見てもわかるように、科学とオカルトの区別がつかない若い人がとても増えています。これは困ったことです。

3番目に、日本という社会の特殊性にもう1回着目するべきではないでしょうか。これは、日本特殊論を唱えたいわけではありません。世界にはさまざまな国があり、さまざまな国柄があります。アメリカという国はすばらしい。アメリカの利点は、アメリカがアメリカであるということです。中国という国はすばらしい。歴史も文化もある。中国の利点は、中国が中国であるということです。日本の利点は、それに日本が日本であることに加えて、日本がアメリカでないということです。つまり、世界標準の国でなくて、しかし、高度な経済と文明を持っている国。こういう、日本には日本の、日本にしかできない、歴史的な現代的な課題があるはずで、というふうなことで、日本という特別なポジション、特別な文化的伝統や歴史を、この21世紀という時代、この現代的な課題とどうやって組み合わせ接合していこうか、ここにこれからの一番の妙味があるわけであって、私はこの問題を考えていこうと思っているんですけども、会場の皆さんもそういう方向でいろいろ考えてくだされば、ありがたいなと思います。

一応、私のお話はここまでいたします。

〔拍手〕

【司会】 橋爪先生、ありがとうございました。

残り時間は、わずかではございますが、これより質疑応答を行いたいと思います。この機会に、ぜひ先生にお聞きしたいことなどがございましたら、手を挙げてくださいますようお願いいたします。

【質問】 一外国人として、先生のお話は非常におもしろくて、ありがとうございました。

ところで、先生、一つの大きな課題を、先生はちょっとばかり話したと思いますが、それは天皇制の問題でございますが、天皇制は、外国人から見た場合、天皇制が存続すべきかどうかはいろいろな考えがありますが、しかしそれを決定するのは、当然ながら日本人、日本国民のことではありますが、しかし先生は、今さっき歴史の問題でちょっとしゃべったけれども、やはり明治天皇に対して、特に、とりあえず昭和天皇ですね、あの方々の政策によって、また、あの方々の側近の政策によって、どれだけ多くの外国人の生命が奪われて、ひどい目に遭った。ところが、残念なことに、それをどうも日本では、特に戦後の日本において、東京裁判もあつたけれども、残念ながら、そこで昭和天皇の戦争責任の問題が語れなくて、今日までに至っていると思います。問題は、日本人は外国で信頼されるべき存在になってほしいと先生はおっしゃったと思いますが、いわゆる天皇、特に昭和天皇の戦争責任を語らないで、それをはっきり明確にしない日本人が、どうして諸外国に信頼できる日本人になり得るかということをおっしゃりたいんです。

【司会】 3人ほど続けてお伺いして、その後、先生にまとめてお答えいただきたいと思っています。

では、ほかにいらっしゃいますでしょうか。

【質問】 今のお話をすごくどきどきしながら聞かせていただきました。ありがとうございました。

質問は、違うものになってしまうんですけども、これからは、個人の違いというのを認めるというか、そういうのを助けるという方向で進めていくべきだというお話だったんですけども、それに対して今の学校の教育というのは、みんな横並びとか、同じようなタイプの学生とかをどんどんつくっていると、そういうふうにおっしゃっていたと思うんですけども、個性のある人間を育てるということと、あと、世の中を支えていく人材ということで、これぐらいのことができる能力がない人間を育てないと困るという、そこら辺、そういう社会の常識というのと、あと、その人の個性というものを、どのあたりで折り合いをつけていくというか、その辺が疑問に思いました。

【司会】 では、もうひと方、お願いいたします。

【質問】 ただいまのお話の一番重要なポイントは、3番のところの2番のところに多分あったと思いますが、そこで、公共性と共同性の区別というところに今回の講演のキーワードがあったんじゃないかと理解しましたが、そういう公共性を、最近先生は、国家とか日本人とか日本語で語ることということを非常に重視されているように見受けられるんですけども、そういう考え方は、むしろ初期の先生の理論的なお立場からすると、ちょっと整合性がどうなっているのかなというのが、最近の先生のいろいろな著作などでは気になっておまして、きょうの講演のタイトルは「日本人はいま何を考えたらいいか」ということなんです、『現代思想はいま何を考えればよいのか』というタイトルのご著書がございますけれども、思想は何を考えればよいのかということであれば理解できますが、先生が、「日本人は」ということを持って来られるということにちょっと、最近戸惑いを感じるんですが、そのあたりのことをちょっとお聞かせください。

【司会】 それでは、橋爪先生、お願いします。

【橋爪】 もっと大勢、手が挙がっていらしたと思いますので、なるべく手短にお答えするという考え方でやっていきたいと思えます。

最初のご質問ですが、天皇制についてのご質問でした。

おっしゃるように、戦前の日本国の国家の行動が外国人に大きな犠牲を強いて、その決着がついていないという問題があると思えますが、なぜ、戦前の国家が外国人に犠牲を強いる構造になっていたかと考えてみますと、それは、私が言いました、国家が神聖なものであったということと関係があると思えます。国家が神聖なものであるためには、それは神話を背景にしていなければなりません。天皇がなぜ日本国を統治しているかといえば、それは日本人の祖先であり、神の子孫であるからと、こういうことになっていると思えます。天皇が支配する範囲が日本であるということなんです。そこで、外国との間に必然的な対立を生んでしまうという要素があります。実は、台湾を統治し、それから、朝鮮半島を併合したときに、この問題は真剣に議論されるべきでした。なぜなら、日本神話の中に台湾や朝鮮半島は出てこないわけだから、日本人としてそれを統合することは本来無理であったはずなんです。しかし、この問題は突き詰められませんでした。そして、戦争に負けてしまって、うやむやになり、むしろ、かえって天皇を象徴としていただく日本国憲法、平和憲法の範囲内が日本人であり、そこが単一民族であるという神話として固着してしまったと思うわけです。

これに対する決着の仕方は、日本人というのを定義し直すこと、そして、国家を世俗の

ものとして、日本の文化とか歴史、伝統というものと切り離すということです。もうちょっと具体的に言うと、日本に市民権の条項を入れて、日本に在留している日本国籍を持たない外国の人々の人権と社会的権限をきちんと保障するという、こういう日本国の体制をとることではないかと思えます。例えば、在日韓国・朝鮮人という方々は公民権が制限されています。そして、その問題について日本政府は、帰化をしろと、国籍を取得しろと、自分の民族のもととの国籍を放棄しろということを要求しているわけですが、こんなにひどい話はないと思えます。ということで、実際問題、日本列島の上に構成されている国家の構成員として、文化的、歴史的な日本人も入ってよいけれど、それ以外の外国人が自由に入って来られるという、こういうふうな日本国を構成し直すことですね。これが本当の意味で、戦前型の日本国の構成から離脱するという道だと思えます。

天皇制の問題について、簡単に天皇制をやめられないという理由は、憲法の合法的な変更の手続の中で、天皇というものが重要な役割を果たしているから、簡単に天皇を退位させられなかったという、そういう歴史的な経緯がありますので、この歴史的な経緯は、それはそれで仕方がないと思えます。今後、そういうふうにもう1回、日本国の国のあり方を国民が議論した上で、選び直し、つくり直していく、こういう営みの中で、今の問題にこたえていくというふうになるのではないかと思えます。

また、個々に被害を受けられた方の補償の問題は、またちょっと別になりますので、ここでは申し上げられません。

2番目のご質問です。個人が差異を持ち、個性を持って、伸び伸び学んでいくということと、最低限これだけは共通に身につけておかなければならないという、そういう学校での要求されることの調和、折り合いの問題ですね。これは折り合えると思えます。というか、逆に、それはお互いに促進し合うものではないかと思えます。強制というのは絶対に必要だと思えます。強制がなければ、自由は自覚できないからです。これは必ずやる。例えば、人を殺してはいけない。それから、物を盗んではいけない。何かそういう社会の決まりというのがあれば、それはわかりやすい形で早い時期に子供に与えるべきです。それは絶対のものです。しかし、その枠に触れない限りにおいては何をしてもいい。こういうことは、逆に枠があるから学べるのです。

同じことで、もし共通に学力を身につけさせるのだったら、その内容は精選して、精選し抜いて、不必要なことは全部なしにしてしまった方がいい。その基本的なものは共通で身につけたらいいと思えます。それ以外のことは全部オプションにして、私は、例えば午

後はサッカーをやる、絵をかくとか、何かそういうふうになっていけばいいんじゃないか
と思います。それを促進するために、ちょっとはしょりましたが、単位制度とか、それか
ら、学校の外部から学力を評価するための仕組み、例えば、英語を勉強するのだったら、
いわばTOEFLみたいな形で、学校の試験じゃなくて、学校の外でやる試験というのを
クリアすればいいようにしてやる。そうすると、到達目標がはっきりすれば、むしろ逆に
自由が与えられると思います。学校の先生が好き勝手な教材で授業をやって、それで、例
えば何点をとらないと単位がもらえないということになると、先生の言うとおりに勉強し
なければなりません。しかし、事前に公開されている問題があって、そこで60%とれば
英語の学力があると認められるということになれば、自分の好き勝手なやり方で、先生の
助けを得ながら勉強すればいい、こういうことになるわけで、単位制や何かの利点は本来
そういうところにあったわけですから、そういう方法で、これは折り合わせていくことは
必ずできると私は思っています。

それから、3番目の質問で、共同性と公共性の問題ですが、この言葉は、実は私が言い
出したことではなくて、加藤典洋さんの本の中に書いてあったことなので、きょうはそれ
を使ったわけでありませうけれども、まず、題について言いますと、日本人がどうのこうの
というのは、こちらのパルテノン多摩がくださったお題であって、私から言い出したもの
ではありません。ただ、私は、その題でいいですというふうにお返事申し上げましたから、
きょうはそれで講演をしているわけです。

それで、私は初期のもの、つまり、一人の人間として、人類の一員として、言葉を使っ
て考えていくという、その最低のベースの問題と、きょうのこのお話の問題とは、もちろ
ん、話しているレベルはちょっと違うんですけど、矛盾しない問題だと思います。とい
うか、最初に、人間と言葉の関係、人間が物を考えるということは何かという根本的な問
題があるからこそ、その応用問題として、ある歴史、ある文化、ある状況に直面してい
るある人類の一部分集団、つまり日本人というものがこの状況にどう直面するかという、
そういう問題も生まれてくるわけです。例えば、言葉ということといえば、すべての人間
は必ず言葉をしゃべりますが、しかし、言葉一般をしゃべるわけではなくて、どうしても
日本語とか英語とか何々語ということをししゃべります。そこで、日本語をしゃべること
に関していえば、言葉をしゃべっている限り必ずあらわれてくる問題があるのと同時に、日
本語のみにあらわれてくる問題ということもあるわけですね。日本語というのは歴史的な
言語共同体ですから。

そこで、その事実を言葉一般のレベルで語ることもできれば、今この時点で日本で生き
ているという現状にどう立ち向かうかという状況的な問題としても語るができるわけ
であって、それは矛盾しない。両方やらなくてはいけないことです。だから、私がきょう
話したのは、それは状況論です。

それから、初期というふうにおっしゃったけれども、十何年前に主として集中してやっ
ていたのは、その原理論の部分ですね。これは往復運動にあるわけであって、矛盾したり、
対立したりする問題ではないんじゃないかというふうには私は思っています。

【司会】 ありがとうございます。残り時間はわずかですが、あと数人の方にお聞きし
たいと思います。

【質問】 ありがとうございます。2点、質問をさせていただきます。

一つは、結論として、これから日本人がどう生きていくべきかということにつきまして
は、私が聞く限りは、今の世界的なスタンダードに合わせていくべきだという、いわば欧
米型の価値観により近づくような生き方をしていくべきだというふうにおっしゃられたわ
けですけども、それと、日本は日本であるという、もう一つの提起とどうかみ合っ
てくるのかということ。

それから、戦前と戦後の問題で、戦前はある意味では暗黒、その裏返しとして、光とし
ての戦後という、そういうとらえ方をされておられるようでしたんですけども、私はむ
しろ、戦前も戦後も、いずれにしろ、正義もあり、不正義もあり、善もあり、悪もあり、
その中で相対的に何を生かしていくのかという判断が時代時代の中で一番大事なのではな
いかなというふうに思うんですけども、そういう理解でよろしいのか。先生の、いわば
戦前が陰であり、戦後が光であるという、そういう意味とはまた違う意味なのかどうか、
その点をちょっと聞かせていただきたいと思います。

【質問】 どうもありがとうございます。最近のニュースなどを見ていると、先生も
3番目の4のところでおっしゃっておられたんですけども、政治家の不在、資本家の不
在ということで、これからの日本を今つくろうとしている人材が、こういう政治家、資本
家であるということは、この流れを変えるのは違うタイプの間人であるということが必要
だと思ってしまうんですけども、その違うタイプの間人は、政治家、資本家とは離れた、もしか
したら宗教家と紙一重のような人物が出てくるかもしれないと思うんですけども、その
ときに宗教家がまがい、もしくは宗教家に近い改革者が出てきたときに、普通に暮らしてい
る私たちがその真偽というか、真か駄かを見極めるのはどういうふうなスタンスを持って

いったらいいか。大衆として、ただ単純についていったら、戦前のファシズムのような形で、違う方向に進んでいってしまう可能性もあるので、その見極めを、これからどういう目を持ってしていったらいいのかと思って、その点に関してお答えください。よろしくお願いいたします。

【質問】 先生、どうもありがとうございました。バブルの時代は非常に物質の時代というふうに言われましたけど、21世紀は心の時代だということを随分いろいろな人が提唱していますし、今は政治家も、みんなモラルの欠如ということをやっているんですけど、21世紀、心を一人一人が大事にしたら、日本はもっと、今のようなあれはなくなって、いい国になりますでしょうか。

【質問】 それでは、橋爪先生、お願いします。

【橋爪】 4番目のご質問ですね。世界的なスタンダードに従ってこうというのが、きょうの議論の趣旨だったように思うけれども、日本が日本であるというこの特徴とどういうふうに関係するのであろうかと。

きょうのお話は、確かに戦後の日本が余りに世界標準と違うやり方で日本の社会を運営してきたという、その問題点を取り入れたので、本来の市場、政治、教育の機能を取り戻そうと、こういう標準化、普遍化の方向でお話をしました。ただ、これは、おっしゃったように、日本が日本の独自性をどういうふうに考えていくかという問題と切っても切れない関係にあります。現状だったら、方向としては、市場経済、科学技術、ジャーナリズムはジャーナリズムの機能を取り戻す、そういう方向に進んでいかなければならない。でも、出発点は日本のこの現実にあります。ですから、その方向に進んでいく過程で、当然いろいろな逆流とか、いろいろな問題が生じてくる。それをどう直面するか。今度は後ろ向きのお話ですね。あるいは、それはむしろ保存すべき大事な特質であるかもわからない。そういうことは、きょうは強調しなかったんですけども、それは相伴った課題です。普遍化の方向に進むから、日本が逆の意味で問題になる。もし、世界と協調していくことを目指さなければ、日本が孤立していいのであれば、日本が日本の特殊性をどうすればいいかということは問題にすらならなくて、ちょうど江戸時代みたいな状態になるわけですね。この二つの要素がいつもせめぎ合っている、それが我々の置かれている状況だと思います。

それから、もう一つの、戦前はやみ、戦後は光というふうにお考えだけでも、そうじゃないんじゃないかということは、ちょっとお聞き違いじゃないかと思います。戦前はやみ、戦後は光と、戦後社会ではそういうふうな学校で教えるけれども、そうじゃないとい

うことを私は申し上げたかったんですね。戦前も戦後もメダルの表、裏で同じだというふうにも言えると、こういうふうに申し上げました。

それから、5番目の方のご質問です。政治家の不在、資本家の不在ということでしたが、今後出てくる新しいタイプのリーダーは、宗教家と紙一重であるような気がする。そういうとき、そのリーダーについていいものかどうか、基準はないのだろうか。

私は、基準といいますか、宗教家では困ると思うんですが、その場合、専門知識を十分に踏まえているという点が大事だと思います。例えば、これからの政治家であれば、現在直面している産業社会や科学の問題、炭酸ガスの問題、原子力の問題、法律制度の問題、こういう専門知識によく通じている必要がある。そういう専門家に高い評価を得られているようなリーダーである必要がある。例えば、麻原彰光さんという人が幾ら宗教家として有能であったと仮にしても、環境問題や税制とか、そういう具体的な問題にどこまでの知識があったらどうか。そういう具体的な問題に対する解決策を持っていることが、そのリーダーであるための条件だと思います。ですから、そこをまず一つの見極めるポイントにさせていただいて、もう一つは、必ずそれをチェックするメカニズムをつくっていただきたい。リーダーであれば、1人に集中するのではなくて、3人とか5人とか10人とか、その候補者を挙げて競争させる。そして、そのうちのだれかに仮に何年間か政治をやらせる、責任を持たせるとしても、3年なり何かたつたところで、成果が上がったのかどうか、もう1回チェックする。だめだったら引きずりおろす。こういうメカニズムがあるかどうかということに注意していただいて、少なくともこの2点、気をつけられれば、そんなに危険にならないんじゃないかというふうには私は思っております。

最後に、バブルの時代は物質の時代であったと。21世紀は心の時代であると。みんなが心のことを気をつけていけば、21世紀はよい時代になるのだろうかというふうなお尋ねでした。

なかなか難しいご質問で、お答えしにくいんですが、きょう私が強調したことは、21世紀は心の時代であるかもしれないけれど、それ以前にやはり物質の時代だと。日本だけがたまたま20世紀の後半に物質的に豊かになったけれども、世界じゅうこういうふうになることは不可能なんだと。これが21世紀の問題です。貧困の問題は一方で広がっております。環境の問題も一方で広がっております。こういう物質の問題を解決していかなければならないです。物質の問題を解決していくための考え方、これをもしモラルとか心とか呼ぶならば、これがなければ物質の問題すら解決できない。ここで、科学技術しかり、

制度の問題しかり、経済しかりですね。どういう知恵を出して、一刻も早く、あるいは困難がなるべく少ない方向で多くの人々に生きやすい状態をつくり出していか、この問題だと思ふんですね。それにはみんなの協力が必要で、科学者は科学者、政治家は政治家、財界人は財界人、そして一般の方々是一般の方々、そして言論人や物を考える人たちはそれぞれのポジションで物を考えていって、そしてその経験を交流させて、一つの日本なら日本というまとまりがあるのであれば、そこで総合的な行動ができるような体制をとる。それは、アメリカとかほかの国もみんなやっていることでありますけれども、そういうふうな体制をとるということが、広い意味での心ではないかと思ふます。微妙な問題にすべて神経を張りめぐらせて、単にお金がもうかれればいいと、こういうのは財界人ではないでしょう、もはや21世紀においては。単に日本さえよければいい。これは21世紀の日本の政治家ではないでしょう。そういうふうなこと。これが、心ということだと思ふます。日本はもはや共同体であることは許されず、人類や地球大の公共性に向かって、日本という国を開いていかなければいけない、こういう課題というふうに私は思っております。

【司会】 ありがとうございます。まだ質問なされたい方もいらっしゃるかと思ふますが、予定の時間となりましたので、これで本日の文化講演は終了させていただきます。

橋爪先生、どうもありがとうございました。

〔拍手〕

【司会】 なお、お手元のアンケートは会場出口で回収しておりますので、ご協力のほどお願いいたします。本日のご来場、ありがとうございました。

—了—